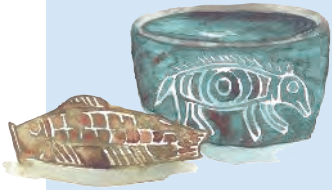
1 医学のはじまり



盤古開天劈地と三皇神話

中国には、地球や人類の誕生についての美しい神話が数多くあります。これらの神話のなかに、薬や医学の起源もみることができます。

宇宙がまだ昏沌としていて、太陽も月も天地もない暗い世界だったとき、ひとつの生命が誕生しました。彼の名は「盤古（ばんこ）」といい、生まれるまでの1万8千年の間、精霊に育まれて眠っていました。

盤古は鋭い斧でこの狭くて暗い世界を二つに切り裂きました。すると、二つのうちの軽

い方は1日1万里の速度で上昇して天空となり、重い方は1日1万里の速度で下降して大地となりました。盤古も1日1丈ずつ成長して天地の間に立つ巨人となり、独りぼっちで1万8千年間生きてから、この世を去りました。これは「盤古開天劈地」という物語です。

この「軽揚上昇の気は陽となり、重濁沈降の気は陰になる」という陰陽の世界観は『黄帝内経素問』にもみることができます。陰陽応象大論篇第五には「清陽上天、濁陰帰地、是故天地之動静、神明為之綱紀、故能以生長収蔵、終而復始」（清陽は天に上り、濁陰は地に帰す。是の故に天地の動静、神明これを綱紀となす。故に能く以て生長収蔵し、終わりて復た始まる）とあり、この陰陽の気によって宇宙の動と静が生じて、万物が生・長・化・収・蔵の変化を繰り返して循環していると書かれています。

盤古がいなくなった後、「女媧」という女性が現れました。彼女はあまりの寂しさに耐え切れなくなり、泥で多くの人形を作りました。その人形たちを地面に立たせると、それぞれ生きた人間に変わりました。女媧はこうして人類を創造した後に、消えてなくなりました。

その後「伏羲」という人物が占い八卦を発明し、最初の人類に漁猟や牧畜の技を教えました。それ以来、人間は肉と魚を食べるようになりました。

さらに「神農」が自らいろいろな草・葉・花・種・茎・果実などを食べて試し、食材と

薬を区別しました。神農は、人びとに植物・医学についての知識や、自ら考案した刀耕火種（焼畑農耕）の方法を教えたということです。火を上手に使用したことから、神農は「炎帝」とも称されています。

このようにして誕生し、食物を得る術を知った人間は、今日まで生き延びることができたことに感謝して、女媧・伏羲・神農を「三皇」として今でも敬っているのです。日本でも、毎年11月23日に「神農祭」を行う習慣があります。

ちなみに、書籍によっては、「三皇」のうち女媧・伏羲を燧人・祝融・有巣氏だとする説もあります。

『山海経』の記録

人びとは、狩猟・漁・耕作をするうちに食べ物としての動植物の性質を自然に理解するようになりました。

春秋時代の最も古い地理書『山海経』には、草木について「其草多薬、芍薬、芎藭（川芎）」や「丹木、円葉而赤茎、黄華而赤実、其味如飴、食之不飢。……黄帝是食是飧、……丹木五歳、五色乃清、五味乃馨」（丹木の葉は丸く、花は黄色、茎と実は紅色で、食

べると甘くてお腹がすかない。この丹木を黄帝がよく食べた。丹木は五年経つと青・赤・黄・白・黒の五色の色がはっきりし、酸・苦・甘・辛・鹹の五味もおいしくなる）という記述があります。

また、「少陘之山、有草焉、名曰薗草、葉状如葵、而赤茎白華、実如蘡薁、食之不愚」（少陘山に薗草という草があり、葵のような葉、赤い茎、白い花、果実は野生の葡萄のようで、食べると聡明になる）とも書かれています。

『山海経』には珍獣についての記載もあり、その薬としての作用についても触れているのは面白いところです。例えば「何羅之魚、一首而十身、其音如吠犬、食之已癰」（何羅という魚は一つの頭部に十個の身体がついており、犬の吼え声のような声を出す。食べると瘡癰が良くなる）などと書かれています。

いずれにしても、2千年以上前の人びとは、食物に薬としての作用があることをすでによく知っていたことがわかります。

神農と『神農本草経』

神農は痩せた人間の身体に牛の頭をもち、角もあったと、『史記』など多くの書物に書

かれています。彼は3歳ですでに農業について理解し、その後、農具・陶器・紡織などを発明したとされています。

漢の陸賈（りくか）の『新語（しんご）』に、「神農、以為行虫走獣、難以養民、乃求可食之物、嘗百草之実、察酸苦之味、教人食五穀」（神農は、虫や獣だけを食べると民衆の生活は維持できない、食物を求めるのに百草果実を食べ、酸苦などの味を調べ、五穀を食べることを教えた）とあります。神農は多くの薬草を自ら食して、食物と薬物に区別し、薬草学の発展に貢献しました。このような医薬に関する神農の功績は『神農本草経』として現代まで伝承されています。

例えば、食卓によく上る長芋は、薯蕷、山薬ともいい、『神農本草経』には「味甘温、主傷中、補虚羸、除寒熱邪気、長肌肉、久服耳目聡明、軽身不飢、延年」（温性、甘味。虚弱、痩せ、脾胃の損傷を補う。寒熱邪気を取り除く。長期間服用すると筋肉が強壮になる。耳目が聡明になり、身体が軽くなり、長寿になる）とあり、「上品（じょうほん）」に分類されています。「上品」というのは、毒性がなく作用が穏やかで、長期摂取することで健康、長寿になるとされる食薬のことです。長芋はすりおろしてとろろにしたり、細く刻んだりして、ご飯や麺にかけて食べます。また、肉と炒めたり、蒸した後に潰してデザートや菓子にしたり、乾燥させたものでスープにしたり、幅広い調理法があります。

この長芋は薬効にも優れ、『金匱要略』血痺虚労病脈証併治第六には「虚労諸不足、風気百疾、薯蕷丸主之」と記載されています。薯蕷丸は、君薬の薯蕷と当帰・桂枝・神麹・乾地黄・大豆黄巻・甘草・人参・阿膠・川芎・白芍・白朮・麦門冬・防風・杏仁・柴胡・桔梗・茯苓・乾姜・白蘞・大棗など21の中薬で構成され、身体の陰陽気血不足や虚弱、さまざまな病気に対して使われます。また、六味地黄丸や腎気丸にも山薬が使われています。

同じく「上品」に属する菖蒲は、『神農本草経』には「主風寒湿痹、咳逆上気、開心孔、補五臓、通九竅、明耳目、出声音。久服軽身、不忘不迷或延年」（主に風寒湿痹、肺気上逆の咳、詰まった心竅を開き、五臓を補い、九竅を通じ、耳目を聡明にし、声を発する。長期に服用すると身体が軽くなり、痴呆にならず長寿になる）とあり、現在では芳香開竅薬として難聴や認知症に用いられています。

火を手に入れる

大昔、原始人は、野獣と同じように「茹毛飲血」（毛を食み、血を飲む）の生活をしていました。しかし、火を発見したことによって新しい人類に進化していきました。雷や山

火事で焼けた野獣の肉を原始人がはじめて食べたとき、きっとその香ばしい匂い、生肉にはない食感、食べた後の腹の心地よさなどに驚いたことでしょう。やがて火種を守り、木を摺(す)り合わせたり、石を打ったりして火を取る方法を覚え、いつでも火の利用ができるようになりました。加熱した食べ物は消化がよいので、原始人の栄養状態は改善され、脳が重くなって賢くなりました。身体を温めたり石針を使ったりするような、物理的な医療行為ともいえるものも始まりました。

こうして人類は定住生活に入り、農耕を始めました。男は農耕と狩猟、女は果実を採集、漁獲は共同作業を行って、食物を分配する集団生活を営んでいたとされています。

また、人びとは生活に必要なさまざまな道具を作るようになりました。特に泥土から陶器を作ることができるようになり、水や食料を貯蔵する習慣ができました。その後さまざまな形の陶器が作られ、用途も貯蔵だけでなく、食材を加熱するためにも使われるようになりました。

このようにして人類は進化し、飲食文化と医学が生まれる条件がそろったのです。新石器時代のことです。